

音と彫刻による環境造形・パブリックアートの提案

2007年7月に作家が小布施町を訪問調査し、固有な場所・環境に対しての作品を構想していたべくところからはじめ、環境に定着（永久設置）させる「パブリックアート」としての計画自体を、提案しアプローチする企画展です。企画展展示期間を通して、具体的な展開へ向けて、地域の方々や観客の皆さんの印象と感想を重ねることで、アーティストの構想が実現することを期待いたします。

音響作品の作曲及び音響システムを計画するクリストフ・シャルル氏は、小布施の街路にて流れる音響として楽曲を作曲し、彫刻家の藤井浩一郎氏は、小布施町に設置する前提での彫刻作品（鏡面彫刻）をプランニングし、パブリックアートの意味と価値を提案します。

音響作家のクリストフ・シャルル氏は90年代初頭より、日常的な音や環境音などのサンプリングデータの複雑に絡み合う多数の音源を組み合わせ、波の動きにも似た永久運動のような循環のリズムが、意図とは無関係に発生し意外な結果を引き起こす、それぞれの音を自由に振る舞わせる創作活動を現在に至る迄、多様な局面で行ってきました。2007年7月に小布施にて環境探索及び環境音のサンプリングをしていただき、小布施の街路に流れる循環の楽曲を設置するという、音響のパブリックアートとして、その楽曲と設置計画の詳細を展示・提案していただきます。作家の示す「静寂もしくは空間を表現するための音」が、小布施という街路で、街の鼓動のように実現することを期待します。

彫刻家の藤井浩一郎氏は、これまで詩的なドローイングワークを平行させ、金属を紙のように折り曲げて空間の情態を鋭利に作品化してきました。2007年より紡錘鏡面立体彫刻の構想を開始しました。小布施町の調査から構想される今回のプランニングでは、澄み渡った大気と街並が、作品自体のミラー曲面に映り込みながら環境に溶ける設置計画の幾つかを展開します。この新しい作品の実現は、自らの造形を誇示するというよりも、行き交う人波と季節の変化を鮮明に映し出し、時には雨に濡れ、雪を乗せ、歴史と記憶の街という小布施の今と未来に向けて、あるがままに見つめられる環境を創出することでしょう。

藤井浩一郎 作品コンセプトコメント

—金属が人に与えるもの—

人間に対して金属、とりわけ鉄は2つの産物を与え続けてきました。ひとつめ。土を耕す道具として使用し収穫される農作物。それらを運搬する手段にも鉄を使います。そうして地球上の多くの場所に人々は行きかい交流し豊かになってきました。その一方で人間は鉄で殺りくの道具も作り出す。レールや船、飛行機もまた侵略の手段に使用されます。つまり鉄は人間に生の恵みと破滅による死を同時に与えてきたのです。

—鉄でヒコークキを折る理由—

折り紙ヒコークキは空を飛行する（地上からの決別）道具のなかで、最も明確なアイテムです。シンプルなそれを鉄で折った瞬間からもはや飛行することは叶わない道具となります。更に自らの錆により崩壊してゆくのです。鉄で折ったヒコークキを通して、人間は無意識に自己の消滅について模索をはじめてゆきます。人間は自己の命が有限であると自覚した時、成人になるといえます。この決して避けて通れない現実にごそ、生命の価値が同居しています。人間らしく生きるとはどうゆうことか・・・？鉄ヒコークキは人間の意識そのもの、つまり心を燃焼して飛行する訳です。

—金属における“変化”について—

鉄を使って作品をつくる時、“変化”という言葉は非常に重要です。例えば鉄。鉄は酸化により錆が発生し、やがては土に帰ってゆきます。人間が錆を見る時、その将来の変化を想像する訳です。（一般的に嫌がられる人が多い）例えばステンレス。合金であるので錆はありません。これを鏡のように磨きあげてみる。鏡面は外界を映し出し、とり込んでゆくようになります。外界は常に変化の連続から成っています。一日の、四季の、人間の姿や感情もまた、変化の連続で、そのたびに鏡面に映し出されてゆく訳です。これらの“変化”に対して、芸術は正面から向かい合い、人間の将来に対するあるべき姿を模索する装置として存在する訳です。

—ステンレス鏡面作品の回転について—

小布施プランにあるステンレス作品は“種 THE SEED”と呼ばれるものです。発芽する種のイメージを人間の“意識の変化”とタイアップされたシリーズです。常に変化してゆく生命の細胞、環境の変化を最大限に意識するために作品は回転するようになります。太陽光をエネルギー源とし、ある人数が集まり、交錯するとはじめて作品は回転を始めます。その回転速度は、無意識の自己の呼吸のごとく、ゆっくりとしたものです。そうして作品の周辺から人々がいなくなったり、回転は止まります。

この回転は、花の蕾がいつの間にか咲くようにひっそりとした、また意識しないと見逃してしまう人間の感情の変化のように静かにゆっくりと回転する訳です。

"STARSHIP -Love is-"

2006 落ちた言葉（エントランス作品の大理石の砂に埋まった断片に刻印された言葉と意味）
LOVE IS（愛情って）
SEE THE LIGHT（産声をあげる）
LIVE FISH（生きた魚）
GRAPS AT THE AIR（空虚をつかむ）
A GREAT DISTANCE（遠距離）
FOUNTAIN（泉）
ICE KEY（氷の鍵）
A BEAUTIFUL SKY（美しい空）
A ROSEATE DREAM（蔷薇色の夢）
ANOTHER NAME（別名）
30135 31246（制作期間）
ONE AND ONLY（唯一無二の）
STAMP WITH A DIE（刻印を打つ）
HOPSCOTCH（石蹴り遊び）
FROM BEHIND THE CLOUD（雲の間から）
FOREVER（絶えず）

「小布施・透明性」クリストフ・シャルル
Christophe Charles : "Obuse / transparency"

小布施北斎館前広場のサウンドスケープのために、作曲をさせていただきます。作曲するにあたって、まず場所を見学し、建築的な、音響的な特徴（空間の形態、環境の構成、周辺のサウンドスケープの構成と、時間帯による変化）を把握した上、作曲を始めました。また、広場での総合プロジェクト（藤井氏の彫刻インスタレーション）に合わせて曲のイメージ及び構成を考えました。

小布施北斎館前広場は日本の伝統を感じさせる空間であり、一種の「透明性」によって、細かい色が見えるようになり、細かい音が聴こえます。全体のテーマ、イメージ、またはコンセプトである「透明性」から、そういった関連のある音の風景を考えました。小布施町の北斎館近辺の静かな路地を歩くと、そこに見える建物や庭園の洗練された色彩、そこで聴こえる音によって、北斎の版画にも感じる独特の距離感が生まれ、風景の様々な層は同時に、観客の頭の中で新たに再構成されます。

町の静けさによってより多くの音が聴こえ、それらの音の間、様々な関係を見出し、「想像的な装置」のように働きます。そのような特徴を強く感じました上で、小布施町の本来の音の風景に、音響作品の設置によって音を加えることで、その「透明性」を強調できればと思っています。

それぞれの曲は様々な空間や風景を連想させるものです。一時間毎、10分程度の曲がくり返されて流れます。一日を4つの時間帯（朝、昼の時間、午後、夕方）に分け、各時間帯においては異なる内容の音楽が流れ、異なる音響空間が広がります。

音楽に使用するサンプルはそのプロジェクトのために特別に制作したものもあり、すでにあった私の作品 [deposition] 及び [undirected] シリーズから持ってきたものもあります。そこから小布施町北斎館前の広場という空間と全体のコンセプトに合うと思われるような音を選びました。ここで一個一個のサンプルの「意味」を定めるよりも、観音者（聞き手）自身の想像を自由にさせたく、そういった説明なしに聴いていただければと思います。

作曲自体、または現場でのバランス調整などはコンピュータ上で行われます。調整の際、直接小布施町北斎館前の広場に使われるアンプに差し込み、音源が9台のスピーカーから流す予定です。携帯できるコンピュータのおかげで、より細かく、より詳しくバランスすることが可能になります。言うまでもなく、それぞれは特殊な音色とピッチを持ち、環境によって、またはスピーカーによって、同じ音でも様々なふうに関わります。その意味で、曲は完成したと言えるまでに、何度も調整が必要があると思われる。さらに言えば、「曲は完成した」と述べることは自らは難しいと思われる。なぜならば、環境も技術も常に変化しているの、その音楽を環境や技術に合わせる必要があり、デストや調整を定期的に行うべきかと思えます。

(機材について、プラン仕様書を御覧ください)

メモリーカードの付いた音源機を仕様し、タイマーによってそれぞれの時間帯において異なる曲を自動的に流します。9ヶ所（8台のフルレンジ・スピーカーと1台のウーファー）からとなります。

スピーカー：BOSE 402 x 4
スピーカー：BOSE 111 x 4 (2組)
同上スピーカー固定金具：BOSE GCW-4
ウーファー：BOSE 502 BP (1台)

スピーカーケーブルカタログコピー：カナレ 4S8
各スピーカーへのケーブルは、アンプ位置よりスピーカーまで、スピーカー1台に対してケーブルを一本ずつ引きます。

音響ラックの設置の際には、背面に300、片側サイドどちらかに300のスペースを開ける必要があります。これはメンテナンスの際の人が入るスペースですので、音響ラック位置では必ずスペースを確保してください。

「音響と彫刻」
町田哲世 / vol.6 コーディネーター・vol.5 出品作家・オブセクンテンポラリー実行委員

私たちは日々を過ごしながら、都度の忙しさに流され、なかなか「聞き耳を立てる」「注視すること」を忘れがちです。そもそも彫刻や音楽というものは、この肉体的な知覚を活性化させて、想起を喚起するものであります。彫刻と音楽という併置は、だから肉体的な「みる」「聞く」という経験のパッケージでもあります。

想起とは、日常の中で喪失した感覚の取り戻しでもあり、新しいイメージの享受でもあり、過去（記憶）への憧憬でもあり、未来への予感でもあり、人それぞれ浮かび上がらせる事は様々であり、現実をより深く豊かに受け止める要因となって、持続する「生」を時には奮い立たせ、時には自身を励ます人間のなかと考えて良いでしょう。昨今のテクノロジーの複雑な発展に伴い、イメージや映像、音響は、簡単にコンピューターデバイスなどから享受可能であり、私たちは机の上や、移動中の乗り物の中で、世界中の情報を得ることができるようになりました。つまり、情報の選択こそが行動の指針となっているのかも知れません。

そんな激しい環境の変化に知らぬうちに慣れ親しんでいながら、一方で現実世界の鮮やかな肌触りにより一層求める傾向が、逆説的に生まれてくるからでもあります。この惑星の環境問題や、経済的社会問題が、選び取った情報に溢れているからでもあります。

彫刻や、音楽といった従来の顕われの、当たり前な成立を少しズラして、併置し、互いが自立を誇るのではなく、「顕われるべき場所」「相互関係」「効果」「意味」といったアプローチから構想するというのが、今回の企画の骨格を成しています。つまり、作家は、「顕われる場所」を念頭に置いて、彼等の制作は開始され、併置される関係性を考慮しながら、自らの作品の変容を試み、従来の自らの文脈に、新しい方向性を与えることとなります。こうした展開を理解していただいた作家招聘を行い、計画から実現への可能性（提案）を孕んだ企画展が生まれました。そしてこの企画展の意味するものは、次世代へ遺すべき地域の環境と、所謂アートの社会的な実践の形の提案でもあります。

自らの表現を深化させる作家の作品が、一挙に翻って外へ放たれる仕組みとして、「場所」と深く関わることから始めることは、「作品の最後に置かれる場所」を見極めるという課題を作家が持つことであり、それが単なる空間や壁ではなく、特定の場所の特定の意味や文脈を覗く制作は、本来のアートの機能性が発揮される筈であり、そうでない、これまで横行してきた単なる移動可能なあるいは所有可能な作品と、本質的に異なる力を持つものであります。道相神や樹々や指標など、場所（環境）にあるモノは、置かれて在る意味があります。高度成長を遂げつつある時、場所の豊かさの象徴として、沢山の（パブリックアート）が置かれましたが、そのほとんどが意味と置かれた選択の意義は不透明のままでした。環境へのアプローチは、開かれて透明性を保持し、開かれている必要があります。こうした提案型の企画展が誤解されるのは、一方的な提案（アイディア）にすぎないと、場所性から拒否される時点で、意味を喪失するのではないかとありますが、一度置かれた種は、さまざまな波紋を呼び、「これまで」とちがった意識を場所は勿論、環境や我々の態度へ促し、次なる展開を呼び起こすことになるでしょう。場所・環境を未来に繋げて真摯に捉える思想は、行政の都市計画や、開発企業の営利目的に、こうした提案型アートが加わることでこそ構築可能なのかも知れません。